論　文

心理学研究方法論をめぐる省察：三心理学の不連続化と連続化の道

吉　田　章　宏

A Meditation on Research Methodology of Psychology: Possible Ways for Making the three (I-, You- and Anybody-) Psychologies Continuous and／or Discontinuous

Akihiro YOSHIDA

淑徳大学大学院社会学部研究紀要第10号抜刷

平成15（2003）年３月

Reprinted from Shukutotoku University Graduate School Bulletin No.10 (March 2003)

論　文

心理学研究方法論をめぐる省察：
三心理学の不連続化と連続化の道

吉　田　章　宏※

はじめに

先の省察（吉田　2001）で，「三心理学」すなわち「我の心理学，汝の心理学，そして，誰彼の心理学」を，それぞれに同定し，その同定の必要性と，その同定に至る経緯を述べた。本省察では，この「三心理学」の同定を基礎に，まず，現在の心理学における三心理学の位置づけを瞥見し，三心理学の不連続化と連続化とを主題化し，三心理学の統合化への道についての省察に進む備えとする。

1．「我心理学，汝心理学，誰彼心理学」：「三心理学」の可能性と現実性

先の省察で同定された「三心理学」，すなわち，「我の心理学，汝の心理学，そして，誰彼の心理学」は，三者ともそれぞれに，空虚な可能性ではなくて，現実的で実質的な可能性をもつ，と私は確信している。しかし，そのことは，「三心理学」が今日の心理学において，同等な現実性をもち，いわゆる「心理学研究者」の間で同等に受容されていることを意味していないことも，自明のことである。言い換えれば，現代の心理学においては，三者が，同様の認知を受けている訳でも，同様に実現されている訳でもない。この点は，先の省察でも触れたが，改めて確認するまでもないこととして，指摘しておく。

現代の心理学は，基本的に，「他者の心理学」である。

言い換えれば，現代の心理学は，基本的に，「我の心理学」を排除あるいは軽視しており，その根幹は「誰彼の心理学」，それに加えて「汝の心理学」，という構成から成っている。さらに言い換えれば，「他者の心理学」の研究者は，個人的あるいは私的にはともかく，少なくとも「研究」としては，自分自身には自らの眼差しを向けない。このことも，先の省察で，「三心理学」を同定する経緯を述べる過程で，既に指摘しておいた通りである。

さて，私がここで提起したいのは，そうした時代の流行に左右される現状の指摘あるいはまた

※　淑徳大学社会学部教授

その現状批判などということではない。現実の心理学研究と心理学研究者の在り様，その現実性の如何は，時代の思潮と流行により，常に変化する。栄枯盛衰，それが世の常というものであろう。しかし，問題は，そうした現実性を超えて，心理学という学問の成立の可能性としては，「三心理学」には，その何れにも，同等の可能性，あるいは「存在理由」がある，ということの確認なのである。「三心理学」の現実の姿あるいは可能な姿は，多種多様であり，三者の間の移行形態もまた，多種多様で在りうるであろう。

「誰彼の心理学」として，具体的かつ典型的な事例として，歴史的に現実に存在した事例としては，J.B.ワトソンの提唱した自然科学としての行動主義心理学を，とりあえず思い描くこともできよう。この心理学においては，研究対象である被験者の「無名性」が顕著である。研究対象者が個人として特定の「誰であったか彼であったか」ということは，研究の結果を左右せず，研究資料（データ）としては，何ら重要な意味をもたないはずだ，とされる。この重要性を持たないという条件こそが，研究の客観性と普遍性・一般性を保証している，と考えられている。さらに，少なくとも，理念的には，研究者が「誰であっても彼であっても」，それぞれが客観的な研究の手続きを踏む限り，同じ結果を生むはずだとされ，したがって，客観的な手続きを踏めば同様の「再現実験」が可能であるはずであるという意味で「再現性」があり，「客観的」で「（自然）科学的」なのだ，と考えられている。言い換えれば，研究の結果が確立すると，研究者も被験者も無名の淵に沈んで行き，客観的な結果だけが残るのが理想だ，とされている。そう，私には思われる。

「汝の心理学」としては，具体的かつ典型的な事例として，歴史的に現実に存在する事例として，フロイトの精神分析学を，これもとりあえず，思い描いておく[1)]。

ここでは，研究対象となる被面接者の「匿名性」あるいは「偽名性」が顕著である。それと対照的に，面接者の「実名性」が顕著となる。すなわち，例えば，心理療法的な面接場面から「汝心理学」が生まれる場合，被面接者と面接者が，汝と我の関係において，面接的対話にかかわり，その過程で面接者に発生する，被面接者の「心」と「心理」への洞察が，「汝心理学」の中核を成す。しかし，その場合でも，その具体的過程と対話的面接内容の関する私的内密性の守秘（プライヴァシー）への配慮から，被面接者の実名は秘匿され，「匿名性」が堅持される。ここで，この「匿名性」が「無名性」ではないことが重要である。面接者にとって「汝」である「被面接者」，「対談者」あるいは「来談者」は，個人的に関わる一人の人間として，決して「無名」などではなく，ただ，やむを得ない正当で実際的な理由から，「匿名」あるいは「偽名」とされるのである。

この点にのみに限定して，「我の心理学」についても述べるならば，「我の心理学」は，研究対象も研究主体も同一であるからして，発表される限り，必然的に，両者についての「実名性」が顕著となる。しかし，事情によっては，さまざまな方法により匿名あるいは無名に近づけること

も，可能であろう。例えば，(1) 研究対象が「我である」ことを暗黙のうちに秘め，そのことへの直接の言及を表面上は回避する方法，(2) 研究対象が「我」であることを秘匿するために，事実をあたかも「虚構」であるかのように記述する方法，(3) 研究主体と研究対象を共に秘匿するために，研究者が，実名ではなく筆名によって，さらには，「虚構」として，例えば文学作品として，発表する方法，(4)「我の心理学」として研究主体と研究対象が同一であるにもかかわらず，「他者の心理学」を装って，「研究主体」を実名とし，「研究対象」を「匿名」あるいは「無名」であるかのように記述する方法などなど，種々の方法およびそれらの組み合わせと変種が考えられる。しかし，「実名」にするか，「無名」あるいは「匿名」にするか，あるいは，また，「事実」として描くか「虚構」として描くか，それらの選択はすべて，研究の主体であり対象でもある研究者本人の主体的責任においてのみ行われうる点が，「我の心理学」の著しい特徴である，と私は考える[2)]。以上のような諸点については，後に，より精しく考えることにしたい。

さて，ここで，「三心理学」の関係について，さらに別の視点からも，考えてみたい。そもそも，心理学は，その発端においては，一人の人間の「生きられた世界」(Lived World) における自己と他者を含む人間の「心」と「心理」を限定された対象とする認識の専門化が起こり，その専門化を営み追究する専門家としての心理学研究者が出現し，その心理学研究者たちによる研究として成立する，とも考えることができよう。そのように考えると，いくら否定しようとしてみても，否定できない事実が浮び上がって来る。それは，「心理学研究者」自身が，一人の人間である，ということである。したがって，一人の研究者の人間としての「生きられた世界」に「心理学」は位置している。心理学は，少なくともその発端においては，心理学研究者である「我」によって創造されていることは，否定できないし，また，忘れられてはならない。端的に言って，フロイド心理学はシグモンドという「我」によって，ピアジェ心理学はジャンという「我」によって，創造されたのだ。

そこで，「我の心理学」の可能性について考えるに当たっては，まず，その出発点に，次の前提を置くことが求められる。すなわち，誰が心理学の研究をするにせよ，その誰かは，必ず，一人の「我」として研究するのであるし，それ以外の在り方では，研究は不可能である，ということである。この前提が承認されれば，考察を次に進めることが可能となる。ここで，一人の人間としての「我」が，心理学研究者として心理学で研究しようとする「心」を，活動，過程，あるいは現象として，他の人間たちと同様に，「持っている」と仮定する。そして，その「我の心」にも「心理」(心の理) が秘められている，と仮定する[3)]。

さて，すると，一人の心理学研究者としての「我」には，まずは，以下の二つの可能性が開かれていることになる。すなわち，まず，何らかの仕方で，(A)「我」が「我の心」を研究する可能性がある，と考えられる。さらに，我には，我にとっての「他者」を研究する，(B)「我」が「他の人間たち」の「心」を研究する可能性も，もちろん，あることになる。ここで，もし，仮に(A)

と(B)の可能性のどちらも無いと仮定するならば，それで，どの「我」にとっても，心理学を発足させる可能性も，ひいては，心理学が存立する可能性も全くないということになる。逆に言えば，心理学という学問の存立の可能性は，(A)と(B)が，「共に，あるいは，いずれか」（ＡＮＤ／ＯＲ），在るということに存している。

ところで，「他の人間たち」の中には「我」と何らかの関係があって，相互に作用し，相互に影響しあっている「他の人間たち」が存在する。つまり，「我」がその「他の人間たち」に働き掛け影響を与え，その人間たちも「我」に働き掛け影響を与える，という相互関係が成立している，そういう「人間たち」である。これが，「汝たち」である。「我」にとっての「汝たち」の「心」とその「心理」を「我」が研究して「我」が明らかにするのが「汝の心理学」である。「人間たち」のうち，「我」と「汝たち」を除いた残りの「人間たち」が「誰彼たち」であり，それらの「人間たち」の「心」とその「心理」を「我」が研究して「我」が明らかにするのが「誰彼の心理学」である。もちろん，「我」にとっては，「誰彼」のうちの一人が「汝」へと変化する場合もあろうし，逆に，ある場合には，ある時点から以降，「汝」が「誰彼」へと変化する場合もあるであろう。そうした変化の詳細をここで展開することは，煩瑣になるので，避けておきたい。

もちろん，一人ひとりの心理学研究者が「我」である限りにおいて，「我」は心理学研究者の数だけ存在する。そして，「我の心理学」の研究も，「我」の数だけ存在する可能性がある。「我」がその我自身の「心」と「心理」を研究する限りにおいて，その研究方法が同じであろうと異なろうと，「我」が他者とは異なる限り，少なくとも「我」にとっては，「我」自身の「心」と「心理」を研究したものとしての「我の心理学」的研究は，この宇宙にたった一つしかない独自なものである。独自の存在である一人の「我」にとって，他者による「我の心理学」をもって，私による「我の心理学」に代用することは出来ない。ここで，人間ひとりひとりの「私」によるそれぞれの「我の心理学」をまず考えることができる。ついで，それら無数の個々の「我の心理学」を要素として，これらの要素総ての集合を考えることができよう。そのような無数の要素「我の心理学」の全集合が組織化され体系化されたものを想定することができ，それをもって窮極の「我の心理学の体系」と名づけることができよう。ここで，特定の個人である「我」の「我の心理学」と，そのような「我の心理学」を要素とする集合の組織された体系としての「我の心理学」とは，「我の心理学」の要素とそうした要素の総てからなる集合として，概念的に峻別しておかなくてはならない。

ところで，以上の「我の心理学」の可能性についての議論は，現在の時点で，どれほど奇妙にまた奇怪に響こうと，それが，可能な展望であるということを，私は否定することができない。言い換えれば，要素としての個人個人による「我の心理学」と，その集合の組織化された体系としての「我の心理学」との可能性は，どちらも私は否定できない。

が，ここで，可能性の世界から，現実性の世界に，立ち戻る。すると，「我の心理学」は，単

一の「要素」としても，そのような「要素」の多くを「組織化した集合の体系」としても，心理学の現実の世界では，未だにあるいは最早，公認されていない。そして，現実には，「我の心理学」は存在していないようにさえ，思われるのである。ところが，上記の可能性の世界から立ち返った私の眼には，逆に，その現実の状況自体こそが，実に奇妙で奇怪なものとして，映ることに気づくのである。これほど明瞭で確実な可能性が，なぜ現実化されていないのか，という疑問が湧きあがってくるのを止めることができないのである。

2.「＜我の心理学＞なしの心理学」:「他者の心理学」の奇妙な現実

「我の心理学」を排除している「心理学」を「他者の心理学」と呼ぶならば，「他者の心理学」のみが存在して，それとは断絶された「我の心理学」が，そもそも存在しないという現代心理学の現実を，もう少し詳しく眺めてみることにしよう。

次のような空想を試みてみる。地球上の人類の中に「心理学」を専門の仕事とする「心理学研究者」たちが生きている。地球上では，「我の心理学」は存在せず，「心理学」といえば総て「他者の心理学」である。そのようになっている理由や事情はとりあえず問わないで，その状況そのものを思い描いてみる。まず，そうした「他者の心理学」を専門とする一人の「心理学研究者」を取り上げてみよう。すると，その心理学研究者が「心」と「心の理」を明らかにするために取り上げられる研究対象としての「心」の「持ち主」にどれほど多数の人間が取り上げられているとしても，たった一人の人間だけは，含まれていないことが明らかとなる。つまり，そこに含まれていない極めて特別な一人とは，その「心理学研究者」自身である。そして，それこそが，いわば「他者の心理学」の定義なのである。そこで，さらに，もう一人別の心理学研究者を取り上げる。すると，事情はやはり全く同様である。こうして，地球上の無数の「心理学研究者」を何処に尋ねて歩いてみても，総てが例外なく，自分自身の「心」と「心の理」をその視野から排除して，彼／彼女自身にとっての「他者」たちの「心」と「心の理」のみを研究対象にして「心理学」を構築している。これが，「他者の心理学」が支配している空想上の地球の，人類の状況である。

ここで，この空想上の地球を表す図Ｐを描いてみる。まず，一枚の白紙を地表と見立てる。その上に，心理学者一人ひとりを極小円で表す。地表には，無数の心理学者が居る。そこで，その白紙には，無数の極小円が描かれる。そのコピーを心理学者の数だけ，つまり，極小円の数だけ，予め印刷しておくことにする。さて，一人の心理学者Ａの「心理学」は，Ａ自身の「心」とその「心の理」は研究対象となっていない，という状況を表すのに，次のようにする。Ａを表す極小円の内部を白地とする。これは，白地は「Ａ」が，その「心」と「心理」とが共に，その「心理学」の研究対象となりえないということを表す，としよう。その特定の極小円の外部には「Ａに

とっての他者」たち，つまり，Ａの「他者の心理学」の研究対象となりうる心理学者たちを表す無数の極小円があるが，それらの総てに影を施し，白地ではなくする。その結果，紙面は，白地の極小円が一つ，その周りは影が施された無数の極小円がある，簡単な図Ｐ(Ａ)が出来上がる。さて，心理学者Ｂの「心理学」についても，別個に同様の図Ｐ(Ｂ)を描いてみる，すると，今度は，「Ｂ」が白地として残される極小円となり，その外部にある総ての無数の極小円には影が施される。以下同様に，無数の「心理学研究者」総てについて，同様の図を，「心理学研究者」の数だけ作成したと，まあ，想像してみよう。どの図においても，極小円はあくまでも極小円である。したがって，「心理学」全体にとって，そのことに何ほどの問題があろう。そうも思える。確かに，仮に，心理学者Ａの図Ｐ(Ａ)と心理学者Ｂの図Ｐ(Ｂ)とを，重ね合わせてみよう。すると，別個に扱った二つの図でこそ目立ったかもしれぬそれぞれのたった一つの極小円の白地は，それぞれ他方の心理学者の図における影に覆われることになり，重ねあわされてできた図［Ｐ(Ａ) ＵＰ(Ｂ)］には，白地は全く見えなくなってしまう。つまり，ある一人の心理学者における「他者の心理学」においては，研究対象となる可能性のある心理学者の集合に，その心理学者自身は，含まれていなかったのだが，複数の「他者の心理学」を重ね合わせる限り，誰でもが，少なくとも「他者」としては，研究対象になる可能性をもっており，従って，「心理学」の研究対象となる可能性を排除された人間は，あるいは，可能性を持たない人間は，地上に誰も存在しない，ということになっている。図Ｐ(Ａ)と図Ｐ(Ｂ)を重ねただけでもそうなのだから，総ての心理学者のＰ図を重ねたＰ(ω)には，全く白地の極小円は見当たらない。「他者の心理学」の何処にも白地の極小円という「穴」は存在しない，と見える。

ところが，しかし，ここで，上述の図Ｐから，次のような図Ｑを作成してみる。つまり，「他者の心理学」の無数の心理学者一人一人に対応して作成された図の総て集めて，それらの図の一枚一枚から，それぞれの「心理学者自身によっては**研究される可能性のない『心』と『心の理』**」を表す白地の極小円を，上記のようにコピー印刷された一枚の図の上に，それぞれの元の位置にそのまま，張り合わせて行くのである。つまり，その無数の白地極小円の全集合を，元の位置のままに，一枚の集合図に纏め上げてみるのである。すると，どうであろうか。そこに浮び上がってくるのは，もちろん，無数の白地小円の集合であり，「我によっては研究される可能性がない我の『心』と『心の理』」の全集合である。この図は，例えば，上記の影に覆われた図［Ｐ(Ａ) ＵＰ(Ｂ)］などとは反対に，ほとんど全体が白地となり，無数の白地の極小円に覆われ，全図を覆っていた影はすっかり消え去っていることであろう。つまり，真っ白に近い図がそこに現れるのである。こうして，「他者の心理学」には小さな「穴」どころか，気がついてみると，全く無視され隠されていて，研究対象とはならない「空白の大陸」が存在していたことが，こうして発見されることになる。以上は，「他者の心理学」研究者の全集合についてのみ考えた。同様に，人間全体について考えることもできる。が，結果は同様であるのに，議論は煩瑣になるので，詳

細は，ここでは，割愛する。

で，つまり，手短に言えば，「他者の心理学」においては，確かに「他者」としては，あたかも総ての人間が，そして，原理的には[4]，総ての心理学研究者が，その「心」と「心理」を**研究される可能性**を有しているかのように見える。ところが，その可能性は，あくまで，「他者として研究する」という限られた仕方での研究を通しての可能性に限られているのであって，「我として我を研究する」という仕方で研究される可能性は，心理学研究者の「心」と「心理」に関しては，その「心理学」では，絶無だ，ということになる。これが，「他者の心理学」，すなわち「＜我の心理学＞なしの心理学」が支配している状況なのである。私は，この状況を，奇妙で奇怪な状況である，と感じる。なぜ，奇妙で奇怪な状況である，と感じられるか。人間が人間の「心」と「心理」に接近する道には，少なくとも「我が我の『心』と『心理』に接近する道」が，確かに存在するにもかかわらず，この可能性が，全く捨て去られ排除されてしまい，「心理学」の視野の外におかれ，締め出されている。従って，「心理学」には，上記の「空白の大陸」が放置されており，そこから得られる「心」と「心理」についてのあらゆる情報，知見と洞察が，「他者の心理学」からは全く脱落しているからである。「他者の心理学」のみの「心理学」とは，そのような大きな原理的脱落を必然的に抱えた心理学であることが判明する。そして，その心理学は，また，そのように，「我について研究する」ことにおいては，何らの特別な学問的訓練を受けていない，従って，その点に関しては，素人と少しも変わりないかもしれない心理学者たちの集団によって創出された「心理学」であることも，判明する。にもかかわらず，そのことが，気づかれておらず，少しも脱落とは受け取られていない，そのことが奇妙さをさらに一層際立たせる。

ここで，「我の心理学」の心理学研究者の全集合について，同様の図Qを考えてみると，「我として我を研究する」という仕方で研究される可能性は，心理学研究者の「心」と「心理」については，影で覆われる。つまり，すべて研究される可能性があり，脱落がない。しかし，逆に，「他者を研究する」という仕方で研究される可能性についての図Q(ω)は，今度は，総て白地となってしまう。これも，また奇妙な状況であろう。この点についても，後の議論のために，自明なことではあるが，敢えて特記しておこう。

それはさておき，まず，「他者の心理学」が，以上のような奇妙で奇怪な状況にあることを，論理的な可能性として，さらには，現実に近い状況の理想型として，ここで確定しておきたい。ここで，慎重に，「理想型」と記しておくのは，「三心理学」の不連続性の連続化によって，現実には，「他者の心理学」にも，「我の心理学」に近づいた多様な変種が忍び込んで来る可能性が存在するからである。このことは，後述する。

3．心理学者は「ご自分のことがおわかりにならない」

ここで，気分と調子を少し変えて，20年ほど前，都心で行われたある立食パーテイでの出来事を話したい。私は，参加者数人の輪の中で談笑していた。その中で，雑誌編集者だった私の古くからの親しい友人が，次のように述べて，その場の話題を提供したのである。それは，楽しい雰囲気の酒席であったから，その編集者も上機嫌で気楽に軽口を叩いていたのだ，とご想像いただきたい。さて，彼はこう言ったのである。「心理学の先生方とは，ずいぶん大勢の方々と，長年にわたって，お付き合いいただいているのですが，気がついたことがあるんです。それは，心理学の先生は，他人のことは良くお分かりになるが，ご自分のことがさっぱりおわかりにならないようだってことです。吉田先生は例外ですがね……」と。爆笑が起こった。もちろん，最後の言葉は，私に対する社交的辞令であることは，いうまでもない。ただし，安心してこのように言うほど，その友人が私に心を許してくれていたということは，言えるかもしれない。さて，このコメントに，その輪の中に同席した他の二，三の人々も，爆笑しつつ，いたく共鳴した様子を示したのである。

もちろん，このコメントは，いわば酒席での冗談に過ぎない。しかし，冗談は，フロイトによるまでもなく，本音を表すことも，真理を鋭く突くこともある。そして，この冗談には，本音と真理が隠されている，と私は直観したのであった。それは，心理学研究者は，たとえどれほど深く心理学を研究したとしても，その心理学が，「他者の心理学」である限りにおいて，心理学研究者自身の「心」と「心の理」については，決して専門家あるいは玄人としての，訓練を受けているわけはないのだ，という真理である。言い換えれば，心理学者は，自分自身の認識に関しては，その専門の学問である「心理学」を学んでいるからといって，それを学んでいない素人に較べて，優れているとは必ずしも限らない，ということである。そのことは，心理学が「他者の心理学」であることの，全く当然の帰結であるということに，気づかされたのである。それだけではない。むしろ，「他者の心理学」が「科学的」で「客観的」であることに強く執着する限りにおいて，心理学者は，単に自分自身について素人と較べて優れていないばかりでなく，他者の「心」と「心理」への洞察の深さにおいても，そうした執着のない自由奔放な素人と較べて必ずしも優れてさえもいないのではないか，そのような不安さえ覚え始めたのである。なぜならば，「科学的」で「客観的」であれという至上命令の制約は，日常生活においては，自他の「心」の機微に対する洞察を獲得する上では，助けになるというよりは，むしろ，足枷にさえなりかねないからである。「心理学は科学的で客観的である」と誇ってみても，現実の日常生活では，心理学には素人の社会人さえにも「ご自分のことはおわかりにならない」と物笑いにされることに，ある種の歯がゆさを覚えたのは，私自身も，自分を心理学研究者仲間の端くれとして同一化しているからであったことにも，気づかされたのだった。

いずれにせよ，「心理学」が「他者の心理学」である限りにおいて，「我による我の『心』と『心理』」への洞察は，素人に較べて必ずしも特別優れているわけではない，という結論は，私自身が心理学を始めた動機の一つが自己理解の深化への希求であったこと，「心理学」研究における若き日の初心を想起して，私は，少なからず衝撃を受けたのである。

4．三つの心理学の不連続化：「三つの心理学を不連続とせよ」

三心理学の間は，連続であろうか，不連続であろうか。この点に関しては，不連続とする説にも連続とする説にも，それぞれに一定の限界内で，妥当性がある，と私は考える。しかし，どのような点に関してどちらの立場をどのように採るか，ということが，それぞれの心理学の在り様をさまざまに条件づけることになる，と考えられる。

まず，三心理学の間には断絶があるという考え方。言い換えれば，三心理学は相互に不連続であるとする考え方を，簡単に検討してみよう。

我と汝，汝と誰彼，誰彼と我，この間には，いうまでも無く，人間としての共通性がある。しかし，その共通性の基盤の上に，相互に明確な区別が存在する。「我」が行う心理学的な研究対象としては，我，汝，誰彼の間には，明確な区別が存在し，「我」にとっては，三つの心理学は，相互に明確に区別される。しかし，心理学として，この区別を絶対視するか，あるいは，相対視するか，この点については，多様な視点が可能であろう。

もし，三心理学の間の区別を絶対視し，不連続性を強調する考え方を採るなら，結果として，「我の心理学」の排除を招くことにもつながる。

心理学の研究方法に関しても，不連続性を認める考え方がある。

「心理学研究法における研究の基本的方法は，観察と実験である」（ルビンシュテイン　［秋元他訳］1981：58)。観察には，「自己観察」と，「外的観察あるいは客観的観察」とを，区別できる。我々の議論を活かせば，「自己観察」と「他者観察」と区別してもよいであろう。さらに，外的観察は（活動を直接に観察する）「直接的観察」と（間接に，活動の所産を，観察する）「間接的観察」に分けられる。実験にも，人工的な実験と，実験と観察の間の中間形式としての，「自然的実験」（ラズルスキー）が区別される。そのほかに，補助的研究法として，発生的方法，生理学的研究法，社会学的方法，教育学的実験方法，などを考えることができる。そのほか，言語報告法，面談法，たとえば，フロイトの「精神分析的面談法」，ピアジェの「臨床的面談法」，アンケート法，テスト法，精神病理学的方法などを，取り留めもなく，挙げることができよう。ここで，「ＸＸ学的方法」と名づけられる一連の諸方法は，元来，心理学において発見された独自で固有の研究方法というよりも，「ＸＸ学」から心理学に輸入され模倣されたいわば「外来の」研究方法である。

では，三つの心理学それぞれに，独自で固有な研究方法は何か。

ここで，「他者の心理学」とは区別される「我の心理学」には，内的観察（内観法，自己観察）が固有な方法として挙げられる。「我の心理学」といえば，研究方法はこれだけしかない，と考える人が，どうも多いように思われる。後述するように，それは，全くの誤りである，と私は考える。「他者の心理学」としての「汝の心理学」には，外的観察，対話面接法，あるいは，実験法が対応する。そして，もう一つの「誰彼の心理学」には，実験法，調査法，時には，面接調査法などが，対応する。このような考え方を，少なくとも広く見られる一つの常識としてとりあえず同定し，以下，この常識を取り上げてみよう。

ここで，「我の心理学」における「自己観察」は，「他者の心理学」における「自己観察」とは，研究者である「我」の立場からは，峻別されなければならない。(A)「我の心理学」においては，「我」が「我」の「心」を観察し「心理」を洞察するのである。これに対して，(B)「他者の心理学」においては，「汝」であれ「誰彼」であれ，「我」にとっての「他者」自らがその「心」を観察しそれを研究者である「我」に，恐らく，主として言語的に，記述報告し，その報告資料に基づいて，研究者である「我」がそこに現れる「心理」を洞察するのである。「自己観察」（内観法，内部観察）という場合，(A)と(B)は，同じ「自己観察」という名で呼ばれうるとしても，心理学研究者である「我」にとっては，まったく異なる方法であり，絶対に混同してはならないことを，ここで指摘しておく[5]。

さて，では，三心理学の間の不連続性は，どのようにして生まれたか。

これは，一言で言えば，心理学の，哲学からの独立と，自然科学への接近とから，生まれた，と言ってよいであろう。ジオルジは，そのことに，次のように簡潔で適切な表現を与えている。「自然主義的心理学（Naturalistic Psychology）は，それが直面する逆説に気づいていない，あるいは，無関心であるように思われる。というのは，その中では，自然は，世界から意識を捨象したものと理解されている。にもかかわらず，それ（自然主義的心理学）は，意識を取り除いた諸現象に基づいた諸概念を用いて，意識とその諸活動を理解しようと望むのだからである。このタイプの心理学には，19世紀後半における発端以来の現代心理学の大部分が，包摂されるであろう。」(Giorgi 1986:54)

言い換えれば，自然科学主義の心理学は，もともと心理学の主題であるはずの意識や経験や関連する諸現象を，「世界」から取り除いた残余として理解された「自然」の諸現象の研究により創造された諸概念を用いて，「自然」においては初めから取り除かれている「意識や経験」を理解しようとしているのだから，それは根本的な逆説であり，そこにこそ，自然主義的心理学が自らは気づいていない重大な足枷と落し穴がある，とジオルジはいうのである。ここに，現代心理学において，「我の心理学」が「他者の心理学」と区別され，排除された大きな理由がある。自然科学は，「我」を「我」としては研究しないからである。自然科学を模範としてそれを模倣し，

自らも自然科学たらんとした心理学も，「我」を「我」として研究する道を，自らに対して閉ざしてしまったのである。

自然科学としての「他者の心理学」は，「汝」と「誰彼」の間に区別を設けない。それは，「汝」と「誰彼」の間を他者として何ら区別しない心理学である。「我」との関わりを無視するからである。時には，「他者」を「有機体」あるいは「生体」として捉えさえもする。

共に「他者の心理学」である「汝心理学」と「誰彼心理学」の間を不連続化する試みは，自覚的にあるいは無自覚的に，心理学の研究法において，種々なされている。それは，主として，「誰彼の心理学」の観察あるいは実験の結果が，「我」の作用の混入によって，誤差を生じ「不純」になることを防ぐ方法として，現れている。

例えば，One-Way Magic Mirror（半透明鏡）を通しての「我」による「他者」の外的観察が，考えられている。観察者としての「我」の存在により，他者の行動は，多少とも変化する。つまり，被験者が観察者を意識し，観察者と交流すると，観察される被験者の行動も，観察者の存在そのものによって，いわば「撹乱される」ことになる。この撹乱を防止しつつ観察するための装置が，つまり，観察者が一方的に観察し，原理的には，被験者が観察者の存在にすら気づかなくするための装置が，Magic Mirror である。これは，「誰彼の心理学」が「汝の心理学」へと変容することを最小限に食い止めようとする装置である，とも言える。「誰彼の心理学」に，暗黙のうちに，「汝の心理学」との差別化が生じていたことが明らかになる。以上のように，三方法を不連続にする諸方法が，自覚的あるいは無自覚的に，種々考案されている。ルビンシュテインは，その著『心理学』のなかで，ここで言う「他者の心理学」について，次のように記していた。「研究者，すなわちそれら内面的諸過程がそのひとに存在することが暗に前提されているところの外的な傍観者と，被験者，すなわちそれら内面的諸過程がそのひとに存在することが否定せられている，ひとととの間の分裂」（ルビンシュテイン［内藤他訳］1970 下:165），と。

次の点が明瞭に浮び上がってくる。それは，以上のような「被験者と研究者の断絶」を，明示的にせよ黙示的にせよ，内包している心理学は，心理学としては，心理学研究者の心理を理解する水準に到達することができない，さらに言えば，多種多様な心理学を「人間の研究活動の所産」として理解する水準にも到達することができない，ということである。言い換えれば，被験者と研究者の間に断絶を設けることにより，自然科学的な厳密性と普遍性を獲得したと思った途端，他の心理学研究者による「多種多様な心理学」を人間による認識活動の所産として理解する可能性を，そして，その心理学者自身による心理学研究自体を理解する可能性も，無自覚にも，放棄してしまっていたことになるのである。そして，敢えて言えば，逆に，原理的に，多種多様な心理学の総てを理解できなければ，人間の心理学としては，「他者の心理学」としての「他者理解」においても，「我の心理学」としての「自己理解」においても，不十分であることは，そのことの自覚の有無にかかわらず，明らかであろう。なぜなら，他の心理学者たちも，例外なく，それ

ぞれに人間なのであり，ネズミではないからである。そして，ネズミには「人間の心理学」を創造できない。

他方で，研究者と被験者・被検査者を連続化し，被験者を共同研究者（Co-researcher）として意味づける思想が，唯物論心理学と現象学心理学とのそれぞれで，相互に呼応するかのように主張されているのを見いだした時，極めて新鮮な印象を受けたことを思い出す。が，この思想も，いずれ慎重に検討されなければならない問題を内包している。

5．三つの心理学の連続化：「三つの心理学を連続とせよ」

一方に，三心理学の間の不連続性を認める考え方があれば，他方には，当然，三心理学の間の連続性を認める考え方がある。もし，不連続性が自明な前提としてあるならば，時の流れと共に，そこに連続化を導入する動きが生じる。逆に，連続性が自明な前提としてあるならば，時の流れに従って，そこに不連続化を導入する動きが生じてくる。

実際，「我の心理学」を排除する「他者の心理学」の立場，つまり，「他者の心理学」と「我の心理学」の間に断絶を認める立場，の中にも，実は，「我の心理学」への回帰を促がす多種多様な動きが，自覚的にあるいは無自覚的に，そして，明示的にあるいは黙示的に，生まれてくる。それは，心理学研究者が一人の人間として「我」であり，自然科学としての心理学の立場を必ずしも厳格に遵守しない日常生活の場においては，人間の「心」と「心理」への接近において，可能な三心理学の接近の何れをも活用して，常識人として，生きていることが，目立たないがしかし一つの有力な理由である，と私は考える。

例えば，哲学的には極めて厳密な独我論者であっても，日常生活では，一人の人間として生きている限り，友人と交際し，家族を持ち，食事もする。「生理的早産」（ポルトマン［高木訳］1961:60）の人間の場合，独りではその生涯を始めることさえ出来ない。同様に，また，「他者の心理学」を専攻する心理学研究者であっても，日常生活においては，「我の心理学」を活用しており，それは，密かに，彼の「他者の心理学」にも入り込むのである。その意味では，自覚的でも明示的でもないとしても，「他者の心理学」の中には，「我の心理学」の萌芽が，必ずといってよいほど，紛れ込み，隠され秘められているものなのである。同様に，「他者経験」には，「汝」の経験も「誰彼」の経験も，当然，存在し，心理学研究者だけが，その一方だけしか経験しない，などということは，そもそもありえない。したがって，三心理学のいずれもが，心理学研究者の日常生活を通じて，多種多様な仕方で，相互に通底し合っている，と考えられるのである。

そこで，「我の心理学」を「他者の心理学」へ向けて積極的に連続化する方向の可能性を考えてみよう。まず，「自己観察」あるいは「内観法」が「我の心理学」の専有ではないことは，明らかであろう。研究者である「私」は，研究の対象者である「汝」や「誰彼」にも，「自己観察」

することを，求めることが出来るからである。言い換えれば，大多数の人間は，少なくともある条件を満たす人々は誰でも，「自己観察」することができる。この点に関しては，心理学研究者も決して例外ではない。そして，その自己観察を，言語あるいは身振り，描画その他の多種多様な仕方で，表現することができる。したがって，それは，複数の人間によって共有される「客観的資料」となりうるし，そこから，心理学研究が出発することができる。ヤスパースは，精神病患者の「すぐれた自己描写」のもつ特別な価値について，次のように書いていた。「特に教養のある知的な患者はすぐれた自己描写をするので，…。このような自己描写を集めて利用することが従来よりも当り前になるためには，その描写の大きな価値を指摘する必要がある。」（ヤスパース［藤森訳］1971:216）

そこで，今度は逆に，「我」が「我」の「心」と「心理」を研究する場合にも，「我」が「他者」の「心」と「心理」を研究するための多種多様な方法は，全て用いることができる可能性がある，ということに気づく。つまり，「我」とわが身を，「我」が研究する「他者」の位置に一端置いて，「他者」を研究するための諸方法を適用し，その結果が客観的な資料として出た段階で，改めて，その同じ資料を，一人の人間である「我」の資料として採用し，その資料に基づいて「我」の「心」と「心理」を研究する，という可能性である。それらの方法で，「我」が「他者」の「心」と「心理」を研究できる限りにおいて，それらの方法で，「我」の「心」と「心理」を研究することもできるということになる。実際，例えば，B. F. Skinner は "*Verbal Behavior*"（1957: 455）において，ユーモラスにも，「私は，これらの諸関係の表現と分析において，科学共同社会の特別な強化随伴性（reinforcing contingencies）に，可能な限り，従おうと試みて来た」と，彼自身の「言語的行動」を，彼自身の厳密な行動主義心理学によって記述していたことが，想起される。

このことは，「誰彼の心理学」の諸方法によって，心理学研究者自身の行動を，他者の行動を記述するのと全く同じように記述することが可能であることを意味する。つまり，「誰彼の心理学」の研究方法によっても，それなりの仕方によってではあるが，心理学研究者である「我」を，「我」が研究することが可能となることを意味する。したがって，「誰彼の心理学」における「我」の研究と，「自己観察」の活用とには，積極的かつ肯定的な意味で，検討の余地があることになる。言い換えれば，逆に，「我の心理学」の研究方法は，決して「自己観察」や「内観」に限られてはいないことが，ここで，明白となる。

実際，考えてみれば，「我」が「我」の「心」と「心理」を研究するとしたら「我」を一人の被験者，研究対象者として扱って，「他者の心理学」の総ての方法を，例えば，テストであろうと VTR による観察記録であろうと，「我」に適用して資料を得ることができる筈である。「我」の場合には，さらに，「我」の「自己観察」あるいは「内観」の資料を「我」の資料として，加えることができる，という利点さえ加わる。人間の行動（行為・動作・振舞を含む）の「客観的

記録化」の方法は，EEG, Eye Movement, Tape Recorder, VTR, DVD などなど，近年目覚しい進歩と発展を遂げた。そのお陰で，多種多様な客観的観察方法および記録方法を，「我」の研究に適用することが可能となっているのである。

逆に，「我の心理学」において，他者の経験と行動を，あたかも「我」の経験と行動であるかのように，記述することも可能であろう。「デカルト的省察」に発するE.フッサールの他者論は，そのことへの豊な示唆を与えてくれている。独我論的モナドから発しつつも，その展開の到達点では，「我」と「他者」に共通する「客観的世界」が構成される。そして，「この客観的世界の中に，私が，他者を，それ自体，完全で，空間と時間の中に状況づけられているある統一的な客体・対象として，統覚する。このようにして，他者は，＜他者一般＞という意味を失い，もう一人の人間存在と成る。」そして，最後には，「私は，遂に，＜人間存在＞という客観的統一体を私自身に付与する，即ち，他者が私を表象する仕方とあり方とに共感的に，私自身を（私自身に対して）現前化する。」(Theunissen 1984:81)

(1) 想像上あるいは空想上にせよ，私が他者に近づき他者に乗移り，他者に同一化し，あたかも他者が私を見るように私を見ることによって，「我の心理学」は，我による「我」の「心」と「心理」の研究でありながら，あたかも他者の目を通した「我」の研究の如くになり，その同一化された他者による「他者の心理学」における一人の他者としての「我」の研究となることができる。こうして，「我の心理学」は「他者の心理学」に限りなく接近する。たとえば，漱石の「我輩は猫である」の猫による苦沙弥先生という人間の観察と研究は，一面では他者「猫」による我「苦沙弥」先生の「研究」のようである。しかし，これは，漱石である「我」が他者「猫」に同一化することによる，「我」漱石が同一化した「他者」猫にとっての他者である「我」漱石の「我の心理学」という構造を体現している。

(2) あるいは，逆に，現実に，「我」Aにとっての他者Bがこの「我」Aを，「我」Bにとっての「他者」Aとして研究している「他者の心理学」を考えることができる。「我」Aは，他者「B」によるその「他者の心理学」的研究における，他者としての「我」Aを研究することによって，現実の他者Bを媒介として，「我」Aにとっての「我の心理学」を創出することもできる。この場合，他者Bによる他者としてのA像は，「我」A自身による「我」A像とは，著しく異なっているかもしれない。しかし，その差異こそが，むしろ，「我」による「我の心理学」を，多面的多視点的にし，より内容豊かにすることであろう。

これは，同一の「我」Aを主題として「我」Aによる「我の心理学」を構想する場合でも，基本的に，二つの場合が考えられることを意味する。すなわち，(A)フッサールのように，自己を出発点に据えて，他者を，「対化」により，自己との「類比」によって，自己の延長上に構想し，いわば「我のような他者」として他者をとらえ，その他者のとらえた自己をもって「我の心理学」とするという構想と，(2)『他者のような自己自身』のリクール（1996）に倣って，自己にとって

の他者を出発点に据えて，自己を「他者のような自己自身」として捉え，そのようにしてとらえた自己自身である「我（自己)」をもって，「我の心理学」とする構想，の二つの可能性があることになる。これらのどちらか一方だけが完全に正しく他方が完全に誤っており，一方を採れば他方を捨てなくてはならぬなど，と言うことではない。「我の心理学」の構想には，両者が共に不可欠で相補的なのである。いや，それのみか，「汝の心理学」と「誰彼の心理学」の構想においても，つまり両者を含む「他者の心理学」の構想においても，同様に，「他者を我として」捉える動きが可能である限り，「他者を他者として」捉える「他者の心理学」のみではなく，「他者を我として」捉える心理学の可能性がある。「他者の心理学」において「他者を我として」と「他者を他者として」の把握の二つの動きは，「我の心理学」における「我を我として」と「我を他者として」の把握の二つの動きが相補的であるのと全く同様に，相補的である，と考えられる。こうして，「我の心理学」と「他者の心理学」とは，その連続化こそが，豊かな心理学の可能性を約束してくれるようにも，この時点では，見えてくる。さて……。

おわりに

三つの心理学の不連続化と連続化をめぐる省察は，「我の心理学」の不在，三心理学の不連続化の支配を自明とする現状，「我の心理学」の復活と創建の必要，三者の連続化の緊急性，三者の原理的な相補性，などを示唆するように思われる。しかし，人間存在において，我，汝，誰彼の間の不連続性は，極めて根源的なものである。安易に，不連続化に拮抗する連続化の動きによって三者の区別を曖昧に解消すればそれでよいとは，決して思えない。無自覚で単純素朴な連続化を越えた，より豊かな統合化，言い換えれば，根源的な不連続性を根底に据えつつ連続化への志向を生かす，より豊かな「多様性を生かした統合化」への道が，希求されなければならない。そうした統合への道が，更なる省察を誘っている。

注)

1)「とりあえず」とここで断っておかなくてはならないのは，フロイトの精神分析学の実践と研究が「汝の心理学」の基本性格をもつとは言え，その学説は「測り知れぬ程多くの観察や経験を基礎としているのであって，自分自身および他人についてこの観察を繰り返す者のみが自分なりの独自な判断を下す大道に踏み入る資格を得る」（フロイド［小此木訳］1969:306. 下線は引用者）とされる，「我の心理学」の側面も強くもっているからである。精神分析における「自己分析」と「教育分析」を想起したい。

2) ただし，この場合でも，研究者の家族や友人が関わる出来事が主題となる場合，本人のみの責任では決めきれない場合も起こりうる。これは，私小説作家が，私生活を主題とする作品執

筆で遭遇するプライヴァシー保持という困難な問題と類似してくる。

3）これらの前提を敢えて「仮定」とすることの意味は，この仮定を前提条件とする限り，以下の議論が成り立つ，ということを明確にして，その仮定的前提条件下における，以下の議論の妥当性を確保するためである。

4）ここで，「原理的には」と断ったのは，心理学研究者が，互いに他の心理学研究者を研究対象として研究することは，「原理的には」たしかに可能である。そして，それには意義もある。が，しかし，「現実には」稀である，と私が考えているからである。

5）この両者の混同は，極めて起こり易い。たとえば，ティチェナーの『心理学概論』（[岡田訳] 1929）の第二章「心理学の方法」には，両者の厳密な区別を欠いた議論が記されている。そのことの意味と意義は，詳細に検討すべき問題点である。

引用文献

Freud, Sigmund 1940　*Abriss der Psychoanalyse.*＝1969，小此木啓吾訳「精神分析学概説」『フロイド精神分析療法』フロイド選集改訂版15所収　日本教文社

Giorgi, A. 1986, The Meaning of Psychology from a Scientific Phenomenological Perspective. *Études Phénoménologiques*, No.4, 47-73

ヤスパース，K. 1971　藤森英之訳『精神病理学研究２』みすず書房

ポルトマン. 1961　高木正孝訳『人間はどこまで動物か』岩波書店

リクール，P. 1987／1990　久米博訳『時間と物語』全三巻 新曜社

ルビンシュテイン, S. L. 1970　内藤耕次郎・木村正一訳『心理学:原理と歴史』下 青木書店

ルビンシュテイン, S. L. 1981　秋元春朝他訳『一般心理学の基礎』第１巻　明治図書

Skinner, B. F., 1957　*Verbal Behavior.* Appleton-Century-Croft

Theunissen, M., 1984　*The Other: Studies in the Social Ontology of Husserl, Heidegger, Sartre, and Buber.* The MIT press

ティチェナー，E. B. 1929　岡田亀次郎訳『心理学概論』理想社

吉田章宏 2002「心理学方法論をめぐる省察：心理学の人称性；我，汝，誰彼の心理学」『淑徳大学研究科紀要』第９号，43-56

A Meditation on Research Methodology of Psychology:

Possible Ways for Making the three (I-, You- and Anybody-) Psychologies Continuous and／or Discontinuous

Akihiro YOSHIDA

The theme of this paper is the clarification of various possible ways for making three psychologies --- that is, the psychologies of I-, You-, and Anybody- ----, continuous and／or discontinuous. The psychology dominating the present-day academic world is essentially the psychology of the other, consisting mainly of the "psychology of anybody", supplemented by the "psychology of you", while excluding and suppressing the "psychology of I". Existentially as well as logically, however, each of the three psychologies has at least an equal potentiality for enriching the knowledge and wisdom of mankind for understanding and explaining the mysteries of human psyche. The present-day situation being dominated by the "psychology of the other" has been sketched out. The strangeness of this dominance is vividly drawn out in its logical outcome that while the specialists in psychology may know others better than non-specialists do, they know themselves no better. The discontinuity between three psychologies is based upon the existentially grave significance of the differences between "I", "You" and "Anybody". However, it also had originated from the history of modern psychology that has been eagerly aspiring to be included among advanced natural sciences, while distancing itself from philosophy and humanities. The continuity and discontinuity between the three psychologies are discussed. Points are made (1) on the necessity of restoring the "psychology of I" to the modern scene, (2) on the mutually complementary natures of the three psychologies, and (3) on some prospects of relating the three. This paper prepares for a further detailed discussion of a richer integration of the three in the future.